

【記録調査報告】

本レポートは大淀町佐名伝にて行われたオカリヤ建てを記録したものに限り、まとめたものである。内容は、オカリヤ建ての進行に合わせて記し、目安としてメモを取る際に記録した時間を併記した。以下、その内容を記す。

～8:02 木枠によってオカリヤの土台部分(以下、木枠と呼ぶ)を作っておき、地鎮を行う。(図1参照) 枠組みの中央に砂と塩がもられる。

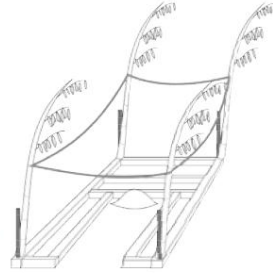
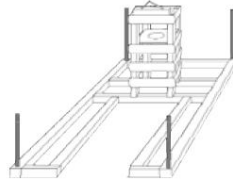


図1 ～8:02の様子

8:02～ 作業の準備を開始

8:08 木枠の四方に立てていた竹と注連縄(地鎮祭用のもの)をとり、邪魔にならない場所によけ、手のあいている人が注連縄を竹からはずして竹を燃やす。



木枠の中央に「ヤシロ」と呼ばれる竹などでつくった台(屋形)を置く。(図2参照)

図2 8:08の様子

8:16 節を抜いた青竹を一本、ヤシロの中央の穴に差し込み、長さを確認する。この時確認した長さを基に、竹の長さ、そして最終的にこの竹の部分に差し込む櫛の長さを調整する。(図3参照)

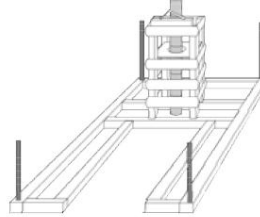


図3 8:16頃の様子

8:21 青竹を再度ヤシロに立てて、その中に櫛を差し込み、バランスを確認する。この時、手のあいている人は地鎮で用いられていた砂を邪魔にならない場所へ動かす。

8:23 青竹と櫛の長さが整った段階で青竹をヤシロにたて、12名ほどで桧の枝(葉付き)をヤシロの側面に差し込んでいく。

ある程度青竹の上部が見えなくなる程度まで桧を差し込み、青竹と桧の枝の根元とヤシロとをひもでむすび、固定する。(図4参照)

その後、全体のバランスを確認しながら、さらに桧の枝をヤシロに差し込んでいく。この時差し込む桧は先刻ま

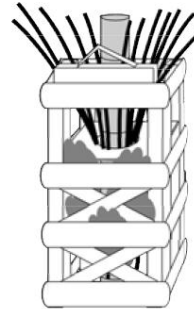


図4 8:23～8:58頃のヤシロの様子

での物より短いもので、オカリヤの側面の壁面を構成したり、屋根の形を整えたりするためのものである。

他3～4名ほどで桧の切れ端などを燃やしたり、次の作業への準備を行ったりする。

※青竹は吉野川の側の竹林から採取する。○年物などの決まりはない（但し担当制か）。桧は、近隣の山から採取してくる。

8:35 ヤシロの側面にも桧を差し込んでいく。(図4)

8:37 ヤシロの屋根をドーム上に整える。その際、ヤシロの正面は半円形状にカットする。

この時、別グループ(3名ほど)が竹を細く切って皮をはぎ、正面最上部に取り付けられた三角形の木枠にはめる、格子状の竹の組み物の作成を始めた。これは、前年度のものを利用して良いらしいが、今年は残っていなかったため作成するようである。

8:42 日の丸御幣(日の丸をあしらった3枚団扇を円形に組み合わせたもの)の作成などを公民館内で行っており、御幣を完成させる。

8:51 オカリヤに用いる桧が不足したため、メンバーが追加分をもってくる。さらにオカリヤに桧を指していく。

この時、まだ竹を三角形に組んでいく作業も平行して行われている。

竹を編むメンバーが3人、桧を指すメンバーが7人、残りの人は掃除をしている。

8:57 公民館にて御幣と三枚団扇の調整

8:58 ヤシロの側面に筋交状に竹材をはめ、桧を抑える。
(図4参照)

9:10 根きりバサミ、剪定バサミなどを用い、ヤシロの屋根部を再度ととのえる。

9:13 新しく、ある程度長さがそろい、葉がついた青竹を4本用意する。この青竹を木枠の四隅に立て、長さを確認する。(図5参照)

9:16 木枠の長辺方向程度の長さに青竹を切りそろえる。

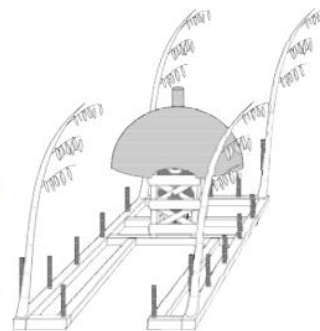


図5 9:13~9:17の様子

9:17 木枠の縁部（長辺・短辺両方）に計 16 本の金属の筒を立てる。（図 5）

9:18 休憩

（作業再開）

この段階まで、

- ・9:17 に立てた金属の筒をはさむように、両側から割り竹をつけて固定する。この時、割り竹の間にできた透き間に、葉付きの桧の小枝が立てかけられる。
- ・木製の棚の脚がヤシロの前に立てられる。
- ・ヤシロ正面にある三角形の木枠に、8:37 から作っていた竹を格子に編んだものがはめ込まれ、その下に小形のすだれがかけられる。（図 6 参照）



9:54 市販の芝（正方形に切り取られて販売されているものを）を半分に切る。その後、この芝を“日”の字状に並べる。但し、ヤシロに近い方が横長で大きい“日”の字状である。“日”の字状に並べた芝のうち、ヤシロに近い方の内側に、地鎮の際に使われていた砂を敷き詰める。

図6 ~9:54の様子

9:58 “日”状に並べた芝のうち、ヤシロから遠い方の内側に砂利を敷き詰める。この時、市販の玉砂利を用いていたが、「そんな吉野川でひろってきたらいいのに。」との発言があった事から、本来は吉野川のものを用いていた事がわかる。

9:59 木枠の縁部に立てた金属の筒のうち、ヤシロ前に設置された木製棚の脚にもっとも近い場所にある筒 4 つに、細い竹の棒を立てつける。この時、別グループがオカリヤ入り口に木製の灯籠を設置する。

10:01 9:59 に設置した竹の上部に、4 本の竹を渡す。この竹を渡すときには、ヤシロより高くなく、しかしヤシロが隠れすぎないように高さに調整する。その後、この上にすだれを設置し、針金で固定する。この頃には、公民館の中で供物の準備が終了している。また、轎に御幣が取り付けられる作業が行われている。

10:12 10:01 に設置したすだれにビニールシートをかけ、その上に押さえとしてオカリヤの短辺方向に併せて二本の細い竹を渡す。

10:14 トヤ3名が白衣(ただし上のみ)を着用し、榊を持って神社へ移動を始める

※この時、榊の枝の先には、尾頭付きのカマス(開き)をいれた袋と、白米、塩をぶら下げた袋(フングリという)が取り付けられていた。



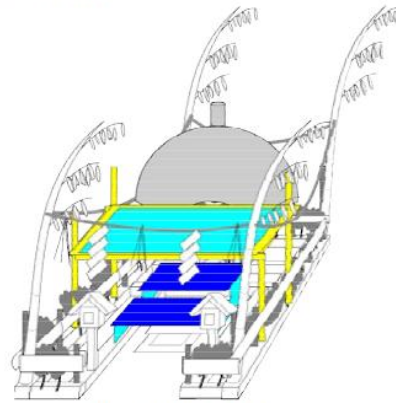
《以下、トヤの動きについて記す。》

10:20 区の中を通過して、神社へ到着。

10:22 本殿の前まで移動し、本殿に通じる階段に榊を立てかける。その後、拝殿まで移動し、2礼2拍1礼の後、般若心経を読み上げる。般若心経を読経した後、再度2礼2拍1礼を行う。

10:29 本殿前まで移動し、榊を持つ(これで榊への神移しが終わる)。公民館に向けて移動を開始する。

(10:35 公民館に到着する直前に一度だけ、榊をもつ人を変更した。それ以外では持ち手は変わっていない。)



《※以下、公民館前の作業チームと合流》

図7 完成間近の様子

10:36 榊が公民館に到着。脚立をたてて、ヤシロの頂部に出ている竹に榊をさしたてる。

10:38 オカリヤの前に設置した棚に、供物を供える。公民館の縁側からオカリヤの前まで、オカリヤ建てに携わった男性が全員、二列に対面して並ぶ。公民館内に置かれている供物を、全員が触れるような形で手越しに渡し、オカリヤの前に供える。

この時、供物を受け取る人は、供物を頸から顔の前くらいまでの高さで受け取り、一度お辞儀(目を閉じ、軽く頭を下げる程度)をしてから次の人に供物を渡していた。

お供え物の内容とオカリヤの前に置かれる順番は、
塩と水→洗い米→餅→尾頭付きの鯛→昆布・スルメ→サツマイモ→神酒→大根→サ

トイモ→白菜→なし→みかん→しめじ→酒（一升瓶）である。
 供物リレーの最後は、三人の頭屋で、決められた位置に供物を配置していた。

10:43 公民館の中で作業をしていた女性も外へ出て、参加者全員に般若心経を配る。その後、オカリヤの正面に女性を含む参加者全員が思い思いに並び、2礼2拍1礼の後、般若心経を読経する。読経後、再度2礼2拍1礼を行う。

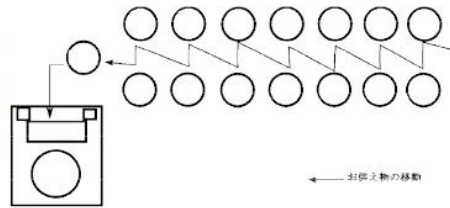


図8 供物奉納の流れ

10:50 オカリヤ建ての全作業の終了。ナオラエ（ナオライ）を行い、解散する。（中東）

【オワタリ】

一週間後の午後、区の人々がオカリヤの前に集まる。オカリヤにこもる氏神を、もとの神社へと送る神事が始まる。これをオワタリ（お渡り）と呼んでいる。

ムラの人々が立ち並ぶなか、神主が礼拝を済ませると、トヤによってよりしるの櫓が引き抜かれ、神主、櫓、御幣をかかげたトヤ、オワタリを知らせる太鼓が、列をなして神社を目指す。子どもの神輿も、後に続く。

鳥居をくぐって階段を上り、神社についた行列は、そのまま小石が敷き詰められた本殿の前に足を進める。本殿の前で、厳粛な礼拝が始まる。

本殿の扉が開かれ、その前に、手越しで供物が運び込まれ、神主の祝詞、玉串の奉奠と続く。こうして氏神は神社へと戻り、来年のトヤに、引き継ぎが行われる。（松田）

【若干の考察とまとめ】

山の神の霊を里に迎えてまつるオカリヤ建ての民俗は、奈良県内でもとくに五條市周辺に集中して残っている。この佐名伝のオカリヤもそのひとつであり、まずは、当地にひろがる御霊神社の祭礼行事との関係が問題となる。

直方体の屋形と、屋根が半円形を呈するオカリヤの形態は、五條市山田の御霊神社と東阿太の八幡神社の例に近似しており、御霊信仰とのつながりのみでは説明できない。この旧大阿太村付近にみられるタイプのオカリヤが、当該地区ではより古形を示すとの指摘もある（黒田 2003）。

佐名伝区とは吉野川を挟んで対岸に位置する下市町新住でも、新住八幡神社の宮座講によるオカリヤ建てが続いている。その形態は佐名伝の例とは異なっているが、直方体の屋形に桧葉の屋根が付き、ヒモロギとしての櫓がさしたてられる所では、類似する構造を示す。また、御霊本宮でかつて行われていたオカリヤも、旧大阿太村付近にみられるタイプ

とはまったく異なっており、オカリヤの形態と御霊神社とのつながりは別に考える必要がある。

佐名伝地区を含め、旧大阿太村付近にみられるオカリヤを考える際に手がかりとなるのは、御霊信仰との関係に加えて、当地一帯が鎌倉時代より興福寺（大乘院）につらなる所領となっていた事である。山口県長門市の清月寺にある梵鐘（山口市指定文化財）には「大和国宇智郡佐那手 称林寺 正応二（1289）年巳丑十一月晦日 別当阿闍梨覺弁」の銘があり、中世を通じて佐名伝の地に、興福寺系の別当職を擁する寺院のあった事がわかる。また、興福寺の南にある猿沢池と水底でつながっているという伝承地「おいの池」も、佐名伝地内にある（但し、平成 23 年度に河川改修工事で消滅する）。



新住のオカリヤ
（中村隆昭氏提供）

これらの文化財や伝承は、当地区の住民と興福寺一帯が、中世以降に歴史的なつながりをもっていた事を教えてくれる。その意味では、オカリヤ建ての一週間後に行われるオワタリを含めて、この行事は、興福寺と表裏一帯の関係にあった春日大社の祭礼（若宮祭）と、御霊神社の祭礼のかかわりを知る好例といえる。

今回記録調査を行ったオカリヤ建てでも、近代化、少子高齢化の流れをうけて、かつて3か所の頭屋宅で行われていたものが、公民館の1箇所へ統合された事情から、地域的な祭礼としての変容が避けられない現状である。とはいえ、町内でこのような古式の神のまつり方がよく伝えられているのは、注目に値する。その伝統文化の継承にかかる背景が、吉野と宇智（五條）の境界地にあつてどちらにも属しえない、当該地区の土地柄（アイデンティティー）によるのか、別の要因があるのか、今後の当行事の継承と活性化を考える際に、継続して検討を進めてゆく必要がある。（松田）

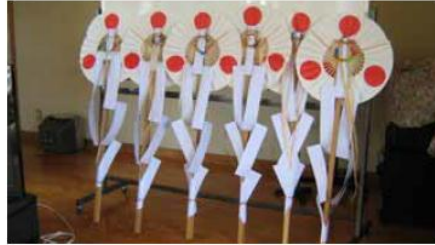
【参考文献】

- ・南義宗「新住の宮座（御仮屋）」『下市町史』1958年。
- ・宮坂敏和「文化財編 第3章 大淀町の社寺 御霊神社」『大淀町史』大淀町史編纂委員会編（大淀町役場）1973年。
- ・原泰根「民俗編 第6章 宮座（座講） 佐名伝の宮座」『大淀町史』同上。
- ・佐名伝区「佐名伝御霊神社 宮座講の歴史」1947年10月（覚書）。
- ・黒田一充「奈良盆地と周辺部のお仮屋」『関西大学博物館紀要』第9号 2003年。
- ・奈良県教育委員会『奈良県の祭り・行事』奈良県祭り・行事調査報告書 2009年。

PLATE 11



01 日の丸御幣作り



02 仕上がった日の丸御幣



03 オワタリの行列



04 オワタリ(本殿前での祈禱)



05 本殿前での玉串奉奠



06 オカリヤ解体後



07 解体されたオカリヤと組み物



08 トヤのカドに建てられていた頃のオカリヤ(中村隆昭氏提供)





